

接客業という職場は、種々折々の人間を観察する環境が整っている。

たとえば、奥さんからお金の無駄遣いを叱られたストレスの発散にパチンコに行く本末転倒なおじさんや、何度もお断りしても両替を求めるお札崩したいおばさんや、得意げに新商品について想像しうる持論を展開しては満足して去っていくお客様。彼ら彼女らの名前も出自も置かれた環境も何一つ知らないまま、ただその立ち居振る舞いのみを記憶する。間違った解釈でお客様に対して酷く失礼な印象を抱いていたとしても、言葉にして発しない以上害はない。また仮に言葉にしてしまったところで、彼ら彼女らの本当の姿を知る機会はほほない。だから今日もショップ店員たちは誰に邪魔をされることもなく、自分勝手な妄想に浸りつつ勤務時間を消化していくのである。

お客様の中には高い頻度で来店をしてくださるいわゆる「常連」という種の人間がいる。一見さんや極稀にしか来店されないお客様に比べ、常連さんは印象に残りやすく、当然妄想も捲りやすい。極端な話、家族構成や学歴、交友関係、将来に至るまで妄想が展開してしまうこともある。

今回はとある某喫茶店で働くアルバイトの妄想した二人の女子学生の関係性について、少しご覧いただきたい。

M
の
肖
像

春、少年は人が恋に落ちる音を聞いた。

少年は一目惚れという言葉信じていなかつた。というのも人間は中身だという考えがあり、およそ中身知る機会などない一目惚れというもの嫌悪すらしていた。見た目だけで人を判断するなど愚かの極みだとさえ思つていた。そんなものに陥つてしまつたことを自覚してはいけないと、頭の中ではけたたましい警鐘が鳴り響いていた。うるさいくらいに波打つ血液が皮膚を破つて出てくるのではないかと錯覚するほどの衝動に、己の置かれた立場も忘れて目の前の甘く柔らかい世界に飛び込んでしまうかと思つた。少年は非常に混乱していた。

「じやあダークモカチップホイップ抜きと、あとバニラクリームフラペチーノを！あ、こつちはホイップ多めでお願ひします！」

現実に引き戻されたのは天の使いと紛う彼女の隣に佇んでいた小柄な少女のオーダーの声だつた。半ば反射でレジを打ち、まるでそのために作られた機械のようにマニュアル通りの対応を行う自身にいつそ違和感を覚えた。ドクドクと脈打つ心臓がやけにうるさい。お客様をジロジロと見ることが大変失礼にあたると知りながら、瞬き一つすることを惜しがだ。しかし、注文内容の確認もその隣にいた少女が行い、彼女の声を聞くことはおろか顔を正面から見ることすら叶わないようと思われた。顔面に張り付いた接客用の仮面を崩さないよう細心の注意を払いながら、彼女の睫毛の一本まで見逃さないよう、この目がカメラであればと呪うほどにその姿を網膜に焼き付け続けていた。受け答えが終了して合計金額を提示し、カルトンをカウンターの向こうに差し出すまでの、平時であれば意識しない短い時間がこのときばかりは永遠に感じた。そしてその永遠の間に、これまで対応していた少女は後ろを振り返り、彼女が鞄の中に手を差し入れる様が見えた。歓喜した。感謝したい神が思い浮かばないことを嘆いたのはおそらく人生ではじめてであろう。今晚にも両親に自身の所属する宗派を聞き出し、先祖も隣人も愛して生きていくこうと思うほど心が踊り狂うのを感じた。少女の一歩後ろにいた彼女が、彼女がいま少年の目の前に来る。全身の毛穴から汗が噴き出す心地だった。彼女の持つ黒い鞄から出てきたのは飾り気のない黒の長財布。取り出された一枚の紙幣——野口英世の鼻の穴まで見たのは後にも先にもこれきりであろう。細かい金額を出すために彼女が小銭入れのジッパーを開ける音に思わず背筋が震えた。こんなにはつきりと聞こえるほど、あの金属の擦りあう音は大きかつただろうか。硬貨を置く際に発すると予想される声に期待し、少年は全神経を向けた。

「はい。」

たつた一言。必要最低限のおよそ何の意味もなさないことば。子供のように小銭の枚数を一枚二枚と数えながらだとか、あと十円出せますだとかのセリフは一切なく、ただ提示金額を上回る額を静かに一度に出す実に無駄のない行動だった。そんなただの一音に少年は打ち震え、涙が出そうになつた。彼女と自身の間にある空気の振動は非常にわずかであつたはずなのに、思わず後ずさりしてしまいそうな衝撃があつた。彼女の声を漏らさず聞

き取れたのであろうかと思うと、常日頃大音量でイヤホンを通じて音楽を聴いている己を呪い二度とするまいと決心するのは容易だった。興奮冷めやらぬ状態であることを他の誰にも知られぬまま痺れる手足を圧して差額とレシートを彼女の手にそつと置く。男性店員は幼い子供を除いた女性の手には極力触れてはいけないという規則の通りギリギリの距離であることに対する憤りはなく、他のどの店員が対応しても彼女に触れる事はないのだという不可触性にぞくぞくした。彼女の体内に取り込まれる商品をこの手で作ることができぬ現実に肩を落としつつ、商品受け渡しカウンターへの案内を行う。

ところが、これが最後の会話であることに気付いた瞬間、彼女の何にそれほど惹かれたのだろうと妙に冷静な思考が顔を覗かせた。落ち着いて観察すると彼女はそれほど見目麗しいわけではなかった。乾燥した唇は割れしており、その上おそろしく化粧もしていない。腰まで伸びた長いみどりの黒髪に心惹かれるものこそあれ、まとめるのが面倒だからという理由で伸ばしちゃばなしなのかと思うに難くない毛先の不揃いさ。女性を褒める際に挙げられやすい吸い込まれそうな大きな瞳もメロンのような大きな胸もない、無個性と呼ぶのがふさわしいほどどこにでもいる容貌だった。かつて好意を寄せた誰かに似ているのだろうかという考察を始めたところで、彼女がカルトンにショップのメンバーズカードを置き忘れたまま商品受け渡しカウンターに向かっているのに気づいた。お客様、と身を乗り出して呼び止めるまでにそう時間はかからなかつた。同時に、店員として染みついた行動であつたもののあの美しい人の行動を遮つてしまつたことに恥を覚えかけ、そんなものが全て吹き飛ぶようなことが起きるとは思いもしなかつた。

呼び止めてはじめて、彼女と目が、目があつてしまつた。それは生後間もない赤ん坊が新しいおもちゃに対して向けるような酷く純粹な疑問に満ちた真っ直ぐな瞳だった。先ほど觀察した通りたいして大きくもなく芸能人のような強い目力もない至つて普通なその瞳を、何故かい今まで見てきたどんなものよりも美しいと思った。ただただ美しかつた。彼女の瞳の美しさを表現するための形容詞を少年は持ち合わせていなかつた。見惚れ、阿呆丸出しで口を開けたまま固まり、手に取ったメンバーズカードは再びカルトンに吸い込まれた。

「……何か？」

「あ、あの、これ、お忘れで、すよ。」

かつてない失態であった。間違いなく末代までの恥だつた。少年は経験が長いこともあり接客にはある程度の自信があつた。事実この瞬間まで激しい動搖を隠し通し全ての行程を無事にやり遂げていた。ここまで口籠るとは思わなかつた。拙い言葉であつたとしてもせめて一息で言えなかつたのだろうか。絶望のあまり高ぶり続けていた気持ちは一気にドン底まで落ち、少年は足の指先まで血液が下がりきる感覚を味わうことになつた。目に見えて指先が震え、もう一度麗しい人の忘れ物を手に取ることができなかつた。少年のそんな動搖は露知らず、彼女は数歩戻り忘れていたカードを回収して少年にこう言つた。

「ありがとう。」

——春、少年は人が恋に落ちる音を聞いた。ストンと何かが落ちた、そんな音がした。あのひび割れた唇が笑顔を振りまくために形を変えた。少年にはそれだけで十分だったのだ。それは雷のように衝撃的にこの心を掴み、女郎蜘蛛のようにこの心を強く絡めとり、今まで気付きもしなかつた心にぽつかりと空いた穴を埋め尽くすほどの気持ちとなつてすぐに溢れ出した。ショッピング店員として相応しい振る舞いなどその時は忘れ、口角挙筋の痙攣が留まるところを知らず、感嘆の声が漏れるのを抑えることはもはや不可能だつた。否定する要素が見当たらぬほどに少年の心にその顔は焼き付き、踵を返して少女の元へ向かう彼女の後姿が店外に消えても夢現から覚めることができなかつた。

少年は恋をした。どこにでもいるような普通の女性の笑顔に心を射抜かれた。それはどんな自然災害よりも甚大な被害を少年に与え、どんな毒よりも強烈に少年を蝕んだ。じわりじわりと広がる思考回路の占拠に喜びさえ抱き、少年は自身が徐々に狂つていつているような気がした。病は氣からという言葉もあるようにすべては人の氣の持ちようならば、人は気持ち次第でどうにでも変わってしまうものなのかもしれない。骨の髓まで彼女の色に染まって、いつたい何になるのかは少年も他の誰も知りはしない。けれどこれだけは明言できる。認めたくはないなどと言いようもないほどに自覚してしまつていた。すべての武装を捨て、笑みすら浮かべ少年は黙つて白旗を挙げた。

少年は、一目惚れをしてしまつたのだ。

※試し読み分は「」で終了になります。

続きは小冊子のQRコードよりお読みください。
ちなみに…試し読み分では…テーマ消化できませんでした…（上）下座）